

Title	書誌コントロール：図書館における知の共有の仕組み
Sub Title	
Author	橋詰, 秋子(Hashizume, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.12, No.1 (2025. 3) ,p.8- 12
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：DMCシンポジウム2024記録 「知と情報と人間：デジタル知の深化と共有に向けて」 開催日時：2025年3月17日 (月) 14:00～17:00 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース 講演1
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000012-0008

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演 1

書誌コントロール：

図書館における知の共有の仕組み

橋詰 秋子

(実践女子大学文学部図書館学課程准教授)

実践女子大学の橋詰秋子と申します。よろしく願いいたします。私は実践女子大学に着任する前は、国立国会図書館に 16 年間勤務しておりました。国会図書館ではいろいろな仕事を担当しまして、最終的には電子情報流通やメタデータ標準に関わる業務を担当いたしました。本日は情報、知の共有がテーマということでしたので、私からは図書館情報学の立場から、「書誌コントロール：図書館における知の共有の仕組み」というタイトルで話題提供させていただきます。

私の発表タイトルにある「書誌コントロール」とは、情報資源を記述しアクセス可能とすることで情報資源の利用を通じた知の作用を活性化する活動を指す言葉です。図書館による情報資源組織化の前提ともいえる概念です。

そもそも図書館による情報資源組織化の手段というのは、分類とメタデータ（目録データ）に大きく分けられます。分類も大変面

白いトピックなのですが、今日は時間が限られていますので、メタデータを中心にお話させていただきます。

書誌コントロールは様々なレベルで行われておりまして、特に世界レベルのものを「国際書誌コントロール」と呼びます。これは各国の納本図書館などが全国書誌、つまり自国の出版物のメタデータのリストを作成し、それを国際的に交換、相互利用することで、世界書誌の実現を目指すという活動です。この国際書誌コントロールの考え方のもとで、ナショナルレベルで図書館がネットワーク化されています。

現在行われている国際書誌コントロール活動の源流は、19 世紀末のドキュメンテーション活動にあるといわれています。このドキュメンテーション活動を主導した人にベルギー人のポール・オトレという人がおります。昨年、このオトレに関して『世界目録をつくらうとした男：奇才ポール・オトレと情報化時代の誕生』¹という本が出版されました。ポール・オトレは 19 世紀末に国際書誌協会という団体を設立して、人類のあらゆる知識を収集分類し、誰でも利用可能にするための活動に取り組みました。具体的には集中作業によって世界書誌目録を作成するという試みを実行しました。

¹アレックス・ライト著、鈴木和博訳『世界目録をつくらうとした男：奇才ポール・オトレと情報化時代の誕生』みすず書房、2024、416p.

この試みは残念ながら第一次世界大戦によって資金不足に陥って断念されるのですが、スライドの左下にある写真がその時の作業の様子を伝えています。世界中から集めた冊子体の目録や書誌から出版物の単位で書誌情報をチョキチョキと切り出して、それを紙のカードに貼って UDC という分類で整理をするという方法です。

このドキュメンテーション活動を主導したポール・オトレの構想を示しているのが、スライド右上にある「世界、知識、学術、書物」と名づけられた階層的な図になります。この図の一番下の段は分類 (La Classification) で、ここから知にアプローチします。その上 2 段目には体系知 (L'encyclopédie) があり、分類に従って個々のカードが秩序立てて排列されている様子が示されています。その上 3 段目は書誌 (La Bibliographie) です。個々のカードに書誌情報が記録されている様子が描かれています。その上 4 番目が書物 (Les Livres) で、各々のカードが各々の情報資源を参照している様子が表されています。そしてこれらの上に、5 段目に学術 (La Science)、6 段目に知識 (Les Intelligences)、7 段目に書物の世界 (Choses) が位置づけられています。このオトレの構想は知識体系の表現手段という目録の一側面を示唆したものといえます。そもそもオトレの構想は西洋の人文主義的な伝統の中から生まれたものですので、これを源流としている図書館による書誌コントロー

ル活動もその伝統に連なっていると捉えられます。

オトレによる世界書誌目録作成の試みは残念ながら失敗しましたが、その後、第二次世界大戦後に今の形の国際書誌コントロールが始まりました。つまり、各国による全国書誌の作成とその公開と共有による世界書誌の実現です。これは国際図書館連盟という図書館の国際団体が中心となって進めている活動で、具体的には書誌作成ツール類の国際標準化を行っています。各国の図書館界は、国際標準に準拠して国内の標準を作り、各図書館は国内標準を用いて自分の図書館のメタデータを作成します。

こうして作られた国際標準は、1990 年代後半になって見直しが進んでいます。その背景には、情報資源のデジタル化、IT の発達、ウェブの普及、またそれらを受けた利用者の嗜好や行動の変化があります。この見直しは現時点ではほぼ終了—まだ終わっていないところもありますが—しており、今は改訂したツール類の図書館への普及、実装が進行中です。

こうしたツール類の見直しの土台となっているのが、国際図書館連盟が発表した書誌的世界の概念モデルです。1997 年に「書誌レコードの機能要件」という概念モデルが公表され、2017 年に「IFLA 図書館参照モデル」という改訂版が公表されています。なお、こうしたメタデータに関わる概念モデルというのは図書館以外のドメインでも作られており

まして、例えば博物館においては「CIDOC CRM」という概念モデルが存在しています。

面白いので少しご紹介させていただくと、スライドに示したものが改訂版である「IFLA 図書館参照モデル」の全体図です。この概念モデルには、実体関連分析という手法が使われています。四角形で示されているのが「実体」で、目録利用者が興味を持つ対象が実体化されています。実体と実体の間には矢印で「関連」が付けられています。この概念モデルは、図書館目録がどのような書誌的世界を扱うのかということについて、図書館ドメインの共通認識となるものとして策定されました。このモデルは、後ほど説明する Linked Data という Web 技術を前提としています。

この概念モデルで中心になっているのは左側の4つの実体—著作、表現形、体現形、個別資料—です。この4実体を取り出すとスライドのようなモデルになります。これは図書館ドメインが情報資源をどのように捉えているのかを示しています。つまり、図書館のメタデータでは図書などの情報資源はこの4レベルで捉えられています。例えば、Jane Austen の Emma という「著作」は工藤政司による日本語訳という「表現形」を通して実現され、この日本語訳は 2000 年刊行の岩波文庫という「体現形」の中で具体化されます。この岩波文庫は、国立国会図書館 (NDL) の所蔵本という「個別資料」によって例示さ

れます。目録レコードのベースは真ん中の「体現形」に置くとされていますが、「著作」や「表現形」のレベルでもアクセス、発見できることが図書館目録の機能要件とされています。

4 つの実体の中で、今日のシンポジウムのテーマである「知」に関わるのが、最上位に位置付けられている「著作」です。「著作」は、個別の創造の知的・芸術的内容と定義される抽象的で非物質的な書誌の実体ですが、実際には、カタログが手元の情報資源から見出してメタデータを作成します。OPAC などの情報システムでは、検索結果リストを提示する画面で、「体現形」レベルにある目録レコードを「著作」の単位で集めて提示する機能（コロケーション機能）で使われています。

目録レコードの著作単位のコロケーション機能は、多くの場合、典拠 ID や典拠形アクセスポイントなどのデータを同定キーとして使って実現されます。典拠 ID や典拠形アクセスポイントを記録したメタデータを作成し維持管理する作業は「典拠コントロール」と呼ばれており、日常の目録作成の中で行われています。国立国会図書館は自館で作った典拠データを「Web NDL Authorities」と名付けたウェブサービスで公開しています。

今スライドでお見せしているのは、サン＝テグジュペリによる著作『星の王子さま』の典拠データです。ID や名称／タイトルの

部分が典拠形アクセスポイントに相当するデータです。これらのデータは情報資源のメタデータにも付与されており、NDL サーチ、つまり国立国会図書館の OPAC ではこのように示されています。典拠 ID などのデータがあることで、違うタイトルで出版された本も「著作」の単位で漏れなくヒットさせることができる訳です。典拠 ID は文字列の揺れを統制する仕組みですので、著作の他にも、個人名（例えばサン＝テグジュペリ）や地名、主題件名などでも作られています。

ここまで簡単にですが、図書館の書誌コントロールについて歴史と活動内容を紹介してきました。最後にこのシンポジウムのテーマに照らして、近年見えつつある将来の方向性について3つお話ししたいと思います。

将来の方向性の1つ目は経済合理性の高いメタデータ作成です。現在、図書館自体に投資されるリソースが減っており、その中でメタデータ作成に割くリソースも残念ながら減っています。そのような状況ではやはり経済合理性を高める必要があり、選択と集中の動きが見られます。

具体的にいうと、図書館外部で作られたデータを流用する、または機械生成したデータを利用する、その上でカタログガーは人間がやるべき作業に特化するという流れです。カタログガーがやるべき作業が何かはまだ図書館界で合意がある訳ではないのですが、私は、①情報資源の主題の判断（分類件名）、②典

拠コントロール（同一著作かどうかの判断）、③関連付け（文脈への位置づけ）だと考えています。さらに、全ての情報資源に対して等しく詳細なメタデータを作る訳ではありませんので、カタログガーが人手をかけて詳細なメタデータを作るのはどの情報資源に対してか、といった判断もカタログガーの大事な仕事になるのだと思います。

この後のディスカッションに関わる話として少し申し上げておくと、先ほど申し上げた選択と集中の結果カタログガーに残された仕事は、いずれも判断が伴うものであり、個人の主観が大きく影響すると私は考えています。これは、知や情報にかかわる主観・客観という論点から見て興味深い事例ではないでしょうか。

将来の方向性の2つ目は、メタデータの図書館外への開放、利活用の促進です。そのために図書館が作成したメタデータの Linked Data 化、Open Data 化、API 提供が進んでいます。例えば British Library は「British National Bibliography Service」というウェブサービスで、全国書誌を Linked Data 化し公開しています。

この動きには、現在の情報環境の中心となっているウェブの世界に図書館が貢献することを通じて、現在の情報環境においても、図書館が重要なプレイヤーであることを示したいという意図が背景にあると考えられます。こうした方向性の著名な例に、スライドに挙

げた「バーチャル国際典拠ファイル」というウェブサービスがあります。

このウェブサービスは国際書誌コントロールの文脈で世界各国の図書館が協働する形で作られており、日本からは国立国会図書館と国立情報学研究所が参加しています。世界各国の図書館が作った典拠データを集めて提供するサービスです。この画面は村上春樹の典拠データですが、各国の言語で優先形、つまり典拠形のアクセスポイントに相当するデータが集められていることが見て取れます。バーチャル国際典拠ファイルでは、図書館のメタデータだけではなく、Wikipedia へのリンクも提供されています。Wikipedia は様々なドメインのデータをリンク付けるコアですので、Wikipedia へのリンクがあることで図書館の典拠データと他ドメインのデータとをマッシュアップしやすくしています。

方向性の最後は、書誌コントロールにおけるローカルの尊重です。この方向性によって、国際標準の策定からデータの相互運用性の確保へと、書誌コントロールの活動の重点が移りつつあると私は捉えています。その背景には、社会全体で国やドメインごとの事情や歴史を尊重しようとする動きがあること、また、先ほど述べた図書館外のデータとの連携しやすさを重視する動きがあることがあります。こうした相互運用性の確保という点で注目されているのが、リンクのハブとなる永続的識別子 (ID) です。図書館のメタデー

タに他機関の識別子を追加したり、また図書館自身が永続的識別子の維持管理を担うなどの事例が見られます。

これが最後のスライドです。先日、シンポジウムに先立って登壇者の方々と打ち合わせをさせていただきました。その中でシンポジウムの内容について少し議論し、私なりに図書館の情報資源メタデータの特徴、独自性は何だろうと考えていました。あくまで私見ではありますが、このスライドにその結論を示しました。図書館メタデータの特徴には、①標準化されていること、②国際典拠コントロールによる統制がなされていること、③これまでの歴史的な蓄積があることが挙げられます。また、これら3つの特徴が西洋の人文主義的な伝統の影響を強く受けているということも、図書館のメタデータならではの特徴の一つだろうと考えております。後半のパネルディスカッションでは、情報、知の共有という面で、図書館メタデータの持つこうした特徴をいかに活かして貢献できるかを考えられたらと思っています。私の発表は以上です。